マルコムの遍歴

ジェイムズ・パーディ
鈴木建三訳

新しい世界の文学

白水社

訳者略歴
一九二九年生
一九五四年東大英文科卒
英米文学専攻
東京都立大人文学部助教授

新しい世界の文学 37
マルコムの遍歴
定価 五五〇円
一九六六年七月一日印刷
一九六六年七月一〇日発行
訳者 © 鈴木建三
発行者 草野貞之
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替 東京 三三二二八
理想社印刷・中野製本

マルコムの遍歴

ジェイムズ・パーディ
鈴木建三訳

新しい世界の文学

白水社

マルコムの遍歴

ジェイムズ・パーディ
鈴木建三訳

白水社

新しい世界の文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヴェラと
ジョーマのために
そして
ステュワート・リチャードソンと
カール・ヴァン・ヴェヒテンに
心からの感謝をこめて

ベンチの少年

世界でいちばん豪壮な、とあるホテルの前で、一人のたいへん若い男が、あるベンチにいつも坐っていました。そのベンチは、光がある角度から照らすごとに、黄金のように輝くのでした。

その若い男は、十五歳より上とはとても考えられないのですが、どこの人間でも、だれの子供でもないようでした。それに、彼がいつもこうやってベンチに腰掛けて待っていることも、なんの役にもたっていないことも明らかでした。なぜなら、彼はだれともめったに話しませんでしたし、この少年の優雅で平静な様子には、この子の孤独さに心を動かされた人たちをも、手を出せなくするようなものがあったのです。ひとつには、この少年は、英語をじょうずにしゃべれそうにない外国人のように見えましたし、彼の待っている様子がたいへんはっきりしていたので、だれもその邪魔をしたくはなくなるのでした。彼がだれかを待っていることは明らかでした。

コックス氏は、当代きっての高名な占星術師で、そしてまたたいへんな健脚家でしたが、（お天気のいいときには、よく一日に四十マイルも歩いたといわれています）しばしばこの豪華なホテルの前を通りました。そして黄金色のベンチに腰をおろしているこの若い男を最初に見たときから、一種の

焦立ちと興味と駭きをすべていっときに感じたのでした。ひとつには、その少年の様子は、吉凶を判断するひとつの《前兆》みたいなものだと感じたからです。そしてこのことは、毎日毎日この子がそこに坐っているということが、この世の実際上の役にたつことはまったくありえないという事実によって、さらに確証されるのでした。コックス氏はさらに、この市のこのあたりには、特に責任を感じていたのです――精神的な意味ではありますが。彼はその生涯の五十数年というものを、ずっとここで暮らしてきていたのです（彼の容貌からすれば、彼は七十とか八十とかいってもおかしくはなかったのですけれど）。そして彼は、このベンチにこの若い男が腰掛けていることが、彼自身の経歴とか思想とかに一つの批評を、もっといってしまえば一つの脅迫を、でなかったとしてもすくなくとも一つの批判は、提出しているように漠然と感じていました――彼の存在に対してとまではいいませんが。

ひとつには、今までだれもこのきまったベンチに、そんなにもしつこく坐っていた人はなかったのです。そのうえ、ほんとうのところをいえば、だれひとりそこに坐ったことはなかったのでした。これは一つの陳列品みたいなもので、一つの役にたたないお飾りとして、そこに置かれていたのでした。だから、車を待っているとても年を取ったばあさんたちでも、どの人もこのベンチには坐る気にはならないのでした。こういった年寄りたちでさえ、その世間知と年の功によって、これがお飾りの品だということがわかったのです。けれどこの子はそのベンチにやって来て、そこに坐りこんでしまい、その一部になってしまったようでした。そのベンチと自分との関係もよくわかっていないのですから、コックス氏が前の晩の星と《星座表》での研鑽を終わって毎朝姿を現わすとき、この少年が、この年寄りの紳士にあいさつをするのはおろか、ほとんどめったに見向きもしないのも、不思議では

ありませんでした。そのかわりに少年はコックス氏を、うつろな、ほとんどめくら同然といってよいような無関心な様子で眺めるのでした。

コックス氏は腹だたしげにじろりとにらみつけます。すると少年は見返しはしますが、目はぱっちりと開いて、しかしまったく無感動な様子なのです。当時のコックス氏は、ある意味ではこの市そのもの、このホテル、そして、氏が自分で考えているところでは《文明》そのものなのですから、こんなにも年若い男からじっと見られるなどということは、とても長く耐えられることではありません。これはまあ一つの敗北とは言えないにしても、氏の生き方に一つの完全な革命をもたらすことになるのですが、とにかくコックス氏は毎朝の散歩の道順を変えるか、このベンチに坐っている若者を認めてやらなければならないことになってしまったのです。

それゆえ、七月のある非常に爽やかに晴れわたった午前に、さる女性のパトロンの相談にあずかるために出かける途中で、コックス氏はあとの遣り方をとることにしたのです。すなわち、この若者の存在を認めてやったのです。

「君はこのベンチと結婚してしまったようじゃないか」とコックス氏はこの若い男にいいました。

この少年はほほえみを浮かべ、ベンチを眺めました。それはほとんど、まるでコックス氏はベンチに話しかけたのであって、自分に話しかけたのではないというような様子でした。

「君だよ」とコックス氏は言いました。たぶんこの少年が、なにか脳に故障があるか、あるいは彼の使った言葉を知らないために、自分の言ったことがわからなかったのではないかと心配になったのです。

「ええ、ぼくはずっといつもここにいます」と少年は口を切り、「ぼくの名前はマルコムです」と言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いました。

「おはよう」とコックス氏はまだすこしいらいらしながら言いました。「わしの名はコックスだよ。」

マルコムはまたほほえみましたが、しかしもうなんにも言いませんでした。コックス氏はたぶん、こんなに見込みのなさそうな始まりぐあいにげっそりしたのでしょう、ずっとそのまま歩き出そうとしましたが、この少年の打ち解けた、どんなことでもゆったりと受け入れる様子、とまどいしたような、なにかを期待しているような様子につきまとっているなにかが、やはり氏をそのままそこにうろうろととどまらしてしまったのです。

「もちろん君は、だれかを待っているのだろうね。たぶん、姉さんを」とコックス氏はもう一度口を切りました。

「いいえ」とマルコムは答えました。その間にもマルコム少年の注意はもうずっとよそにいってしまっていたのでした。そのことはコックス氏にもはっきりわかったのです。

コックス氏は答えを待ちました。

「だれかを待っているわけじゃないんだよ」とマルコムは説明しました。

「だけど、君はほんとうにだれかを待っているような顔をしているよ！」コックス氏はいらいらした気持ちをおさえきれなくなりました。「君はずっとここで待っていたじゃないか――ずっとだ！もう何か月も何か月もだよ！」

「おじさんはぼくをずっと見ていたの？」とマルコムのほうがびっくりしました。

「もちろんわしは見ていたよ。わしはここの人間だからね。この市（まち）の――この――」そして、すぐ手近にいくらでも説明の材料があるのに、氏はやっとのことで、海に面した一筋の土地を指し示すの

でした。

マルコム少年はうなずきました。「そうですね。ある意味ではぼくは待っていることになるんでしょうね」と少年は言い、その顔は今では深刻そうな、しかしものうげな表情を浮かべていました。

コックス氏は、ほっとしたような、そしていくぶんひとりよがりの理解ありげな表情をしました。

「それで?」と占星術師は、マルコムがそれ以上言わないので先を促しました。

「ぼくのお父さんがいなくなっちゃったんだ」と突然マルコムは言いました。

「そうかい。それで、今までずっとお父さんを待っていたわけじゃないんだろう」とコックス氏は言いました。コックス氏は、悲劇だとか死だとかいう話題はいちばん苦手だったのです。それに彼は、マルコムの父親は死んでしまったに違いないと決めこんでいたのです。

マルコムは、コックス氏にそう言われて考えこんでいましたが、とうとう、「じゃ、そうなんです。たぶんお父さんを待っていたのかもしれない」といい、気持ちのいい、力強い笑い声を立てました。

「お父さんを待っているだって!」とコックス氏は、いらいらした気持ちと、それにいくぶんあざ笑うような調子まで混ぜていいました。この調子は、それと親切そうな調子と、ひとり合点なところとともに、氏の持ちまえなのです。

「ぼくには別に、ほかにしたほうがいいことってないんだから」とマルコムはいいました。

「阿呆らしい!」とコックス氏はもうすっかり腹をたてて言いました。「わかっているだろ、わしは君に特別に目をつけていたんだ。」そしてふつうのことを説明するような様子で、「だいたい、今までこのベンチに坐った人はおらんのだから。だれもそこに坐ってはいかんのだとわしは思うね」と続けました。

「そんなことたわごとだよ」とマルコム少年は、コックス氏をいささかびっくりさせるような、はっきりした調子で言い返しました。
「わしはホテルの規則のことを言っているんだよ。」
「そうかい。ぼくはここのお客だから、自分の好きなところに坐っていいんだよ」といって、マルコム少年はこの議論にかたをつけてしまいました。
こんなふうにすげなく鼻であしらわれてしまったので、コックス氏はまた立ち去ろうとし、この少年と自分で言葉をかわしはじめたのだということもほとんど忘れそうになりました。ところが、ちょうどそのとき、マルコム少年がいったのです。
「おじさんどこかへ行く用があるわけじゃないでしょう。」
「わしはいろいろ考えごとがあるんだ」とコックス氏はちぐはぐに応えました。
「それなんだか教えてよ」とマルコム少年はすぐに聞きました。
「もちろんわしには、君がわしのことを今まで知らなかったことはわかっておる」とコックス氏は空咳をして言い、みがいていない自分の散歩用の靴を見おろしました。「わしは占星術師じゃ」とコックス氏はマルコムをまじまじと見据えていいました。
「今でもみんなは、占……お星さまを研究しているの！」とマルコムはびっくりしながらも、そういったことを知ったのがとってもうれしそうでした。
「みんなだって！」コックス氏はたいへん憤然として身を引きました。氏がマルコム少年の驚きに対してちょうどなにかを言い返そうとしたそのとき、氏の視線は少年の服の上に落ちたのです。ところがその服地は、見ればすぐわかるほどの贅沢な代物でした――こんなにみんなが暮らしに困ってい

る時期には贅沢過ぎるもので、しかも、氏にはその趣味のほんとうの性格ははっきりつかめないほどのものでした。

「君にはだれも身内がないって言ってたんだっけね」とコックス氏はまた質問をはじめました。

「だれもって？」とマルコム少年はちょっとのあいだ考えこんだのです。それから、こんな質問は全然振り切ってしまって、自分流のかってなおしゃべりを続けるのでした。「ぼくはおじさんにも坐っていただきたいんだけれど。でも、そうなさりたくないみたいだし、もしそういうお気持ちがなければ、ぼくもおじさんにお願いしようとは思いませんし。」

「君はそうやってなにもわしに教えないようにするんだね」とコックス氏はものうげな調子で尋ねました。

「ぼくは、自分の知ってることはなんでも教えてあげるよ」とマルコム少年はいいました。「ぼくはね」と彼ははじめました。「みんながふつうにいってるような言い方をすれば、《孤児》っていうことになるんです。ずっと生きていくには十分過ぎるくらいはお金はあったんだけれど、だけど、ちょうど今は、しなければならないことは別になんにもないんです。そして、世の中っていうの、ぼくにはちょっとばかり荷が勝ちすぎているんです。ねえ。だから、ぼく、こうやっていつも坐っているんだと思うな。」

「と思うな、だって？」とコックス氏は口をさしはさみました。「君にはわかってるんだろ！」

「そうです」とマルコムはうなずきました。「ぼくにはわかっているんです。」

コックス氏は突然、自分だけの物思いにとりつかれて一人ぼっちになってしまいました。もし彼がマルコムをほっておいて行ってしまっても、これ以上一人ぼっちな感じになることはなかったでしょ

う。もちろん氏は、この少年にこんなふうに質問をし続けることもできたわけですが。けれど、どうも、質問するというのは、まさしく彼の得手というわけではありませんでした。なにしろ、人に答えを与えるほうが、彼の生涯の仕事だったのですから。でも、それと同時に氏は、こんなにいろいろなことが未解決のままで、そのままこの場所を去るということはとてもできないような気がしたのでした。それにまた、この占星術師も、氏がここからいなくなることをマルコムが望んでいないことは、はっきりわかっていたのでした。すくなくとも、二人がほんとうに話を始めるまでは。

コックス氏の考えていることをほとんど読みとったみたいに、マルコム少年がいいました。「もしもだれかが、ぼくになにかをしろっていったら、ぼくそうすると思うよ。」

「だがね、君みたいな若い人がこんなふうにしているのは、賢明なことなのだろうかねえ?」とコックス氏は、マルコム少年にこのことをよく考えるようにさとしたのでした。

「もしぼくがこのベンチから離れられればね」とマルコム少年はいって、両手でベンチにさわりました。「そしたらやってみるんだけれどなあ!」

「だけど、ぼくの習ったことっていうのは、きっとおじさんにもおわかりでしょうけれど、とっても限られているんです。ほとんどフランス語の勉強しかしなかったんです。ぼくのお父さんはねえ、フランス語がとってもよく読めたんです。いっつもヴェルレーヌを読んでいたんです」とマルコム少年は続けました。

「いっつも……ヴェルレーヌだって?」とコックス氏は尋ねました。

しかし、少年はもう先に進んでいました。「だけどさ、ぼくはあまり語学向きの頭じゃないんです。でも、といって、そのほかに別にうまくやれそうなこともないような気もするし。」

「それじゃ、お金をたくさん持っているっていうのはいいことだよ」とコックス氏はベンチからホテルのほうを眺めました。

「だけど、ぼく、もうそろそろ……なくなりかかっているんだよ！」とマルコム少年は叫びました。

「ねえ、お金がなくなりかかっているんですよ。」

「じゃ、わしたちは、いますぐなにかに当たってみなければいかんじゃないかな。」コックス氏はいいました。たぶん、やっと話がどこかにたどりついたので、ほっとしたのでした。

おざなりみたいにうなずきながら、氏は胸のポケットから、表紙に十二宮の図が刷ってある小さな手帳を出して、「君の生年月日はいつかね、マルコム君？」とききました。

マルコム少年は黙ったままでした。

「君、また、自分でも知らないなんていうんじゃないだろうな」とコックス氏は叱りました。

「でも、ちょうどおっしゃるとおりの答えになってしまうんです。ぼく知らないんです」と少年は氏の言葉を認めてしまうのでした。

「じゃ、どうしてわしに、君の手助けができると思っとるのか、わしにはわからんね。」コックス氏はたいへんに怒り出しました。そしてその小さな手帳を、ぱたんと音をたてて閉じてしまいました。「わしは、自分がいつ生まれたか知らないなんていう人間には、とんとお目にかかったことがないな。」

「だけど、いなくなっちゃったんだもん。ぼくにその日付を思い出させてくれる人はだれもいないんだよ」とマルコム少年は、この年長者に訴えるのでした。

「お父さんは、君といろんな計画を話し合ったことがないとでもいうつもりなのかね？」とコックス氏は、もうぽんぽんやっつけるようにいいました。「君が大人になってからのいろんな計画をさ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com